

# 割烹着な人びと

めぐる冒険 24 (最終回)  
わっぱりを



## 加藤ジャンプ

イは、なんだか今まで以上に「亡霊」を感じさせた。さて、二年なんてあっという間。割烹着をめぐる旅をはじめついに最終回になってしまった。まとまっていない……。

連載をはじめ、いよいよいろんなところへ出向いて割烹着の昔と今の証言を集めようとした矢先、いきなりコロナ禍になってしまい、当初とは思っていなかったかたちになっていった。副題に「B級ルポ」と銘打っているが、ルポといっても、どちらからというところ「アームチェアB級ルポ」のようになってしまった。

そもそも、私が割烹着に興味をもったのは、「ほんだし」と「国防婦人会」がきっかけだった。

私が子ども時代を過ごした昭和五十年代。家でも友人の家でも、(すくなくとも私が暮らしていたいわゆる「郊外」では)割烹着を着た母親を見たことがなかった。ところが当時でも、「ほんだし」の広告には割烹着姿の池内淳子がいた。一方で、戦争をあつかうドラマには必ずといっていいほど、主役たちをなじる、おっかない割烹着姿の女性グループが登場していた。

「あの人たちってなに？」

初めて耳にした国防婦人会の名前は忘れようもなか

オリンピックが終わった。担当の大臣はなぜか視聴率を引用し、オリンピックのおかげで期間中の人出がおさえられたはずだというようなことを口にした。なんのことはない。五輪をさかいに感染大爆発である。病床は足りない。自宅療養を強要され、続々人が亡くなっている。宰相は呪文のように「ワクチン」を口にするが、肝心のワクチンが足りないうえに、異物が混入したワクチンが見つかった。

びっくりするくらいめっちゃくちゃである。

そんななか、テレビは終戦も五輪でスルーするのではないかと懸念したが、それなりに終戦記念日からの放送をしていた。そして、なんの因果か、NHKは割烹着についての番組も放送したのだった。『銃後の女性たち』戦争にのめりこんだ「普通の人々」という国防婦人会についてのNHKスペシャル。もちろん、この連載が番組制作の端緒になったなどという話は聞いていない。今回、この連載の最終回で再び国防婦人会についておさらいしようと思ったら偶然かさなったのである。割烹着を追っていると、「亡霊」のように国防婦人会の影がついてまわる、というようなことを折にふれて書いてきたが、今回のシンクロニシテ

った。そして、見た目には同じような池内淳子と国防婦人会の姿がどうしても重ね合わせることができないまま時がすぎていった。結局、家庭のリアルな現場で割烹着を着た人にはついで出会うことがなかった。

長じて酒を飲むようになったら、お店では割烹着姿をちらほら見るようになった。聞けば、

「うきやすい」

「あつたかい」

「すぐ乾いて機能的」

「これを着てればお店の人だとすぐわかる」

などなど、お店の割烹着ユーザーに尋ねると、そんな答えがかえってきた。どれも納得がいった。だから私にとって、リアルな割烹着は、「母」とか「台所」ではなく、シンブルに「女性の仕事着」それも「プロの仕事着」だったのである。

ところが、今だに「母」だの「台所」だのを引き合いにだすと、割烹着がそのシンブルのようにもちあげられる。これは一体……というのがこの発端だった。いかにして、割烹着は二十一世紀にいたっても「母親」や「台所」を象徴する存在となっていたのか、それを追うために、まずは割烹着の由来を調査した。

●かとう・じゃんぶ 文筆家。1971年東京生まれ。横浜とジャカルタとジョグジャカルタとクアラランブルで育つ。著書に『コの字酒場はワンダーランド』(六耀社)など。タイトル、本文中のイラストも筆者。